えど友ホームページ
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第96号
平成29年
(2017)
3－4

江戸東京博物館友の会会報

目次

荒川の五色桜……1～2
平成 29 年度［古文書講座］の概要とご案内……3
見学会「広重『名所江戸百景』周辺探訪 その 15」……4
えど友広小路……5
　えど友サークルだより／館蔵古文書翻刻だより
　／友の会めも
友の会セミナー「行徳と江戸を結ぶ舟運」……6
友の会セミナー「江戸町人の四季と衣装」……7
見学会「恵林寺と甲府の歴史を訪ねて」(バスツアー)……8
えど東京一景(6)－筑土八幡神社－……9
江戸博クリップ「中国ってどうですか?」……9
江戸名所図会を歩く…㉚
　［北沢淡島明神社から八幡山宗円禅寺］……10
催事案内／会員優待のお知らせ……11～12

荒川の五色桜

～江戸で生まれた里桜は海を渡った～

アメリカ合衆国の首都ワシントンD.C.ポトマック河畔の桜並木は100年以上前に東京から贈られました。その桜たちは江戸生まれの里桜でした。

山桜から里桜へ

桜は北海道から沖縄まで、かなりたくさんの野生種がありますが、主な原種として数えられるのは、ヤマザクラ、オオシマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラなど12～13種でした。桜は初め奈良・京都のヤマザクラを中心に品種が成立していきました。ところが源頼朝が政権を握り、鎌倉に幕府を開いたことにより、それまで房総半島、伊豆半島、伊豆七島のごく限られた地域にしか分布していなかったオオシマザクラとの出会いによって、桜の品種に大きな変化が起こりました。

室町時代(1338～1573)、京都の千本閻魔堂に「普賢堂(後の普賢象)」と呼ばれるサトザクラがありました。それは鎌倉の普賢堂から移植されたものだそうですが、花の様子から、オオシマザクラとヤマザクラが出会ってできた品種だとみられています。これは幕府所在地の鎌倉で作られたサトザクラが、御所のある京都に間を置かずに伝わったということで、園芸品種の流通が、私たちが想像する以上に早かったことをうかがわせます。ちなみに現在のサトザクラのほとんどは、オオシマザクラから出た品種です。

江戸の植木屋と桜の品種改良

江戸は世界一の庭園都市だったといわれています。大名や旗本は幕府より与えられた広大な自邸に庭園を造るようになりました。そこに出入りする民間の植木屋たちは大名庭園の作庭、樹木の剪定や花壇作りで造園技術を高め、自宅でも栽培、販売するようになりました。『東都紀行』〔享保４年(1719)刊〕には多くの植木を栽培しながら販売していた染井の植木屋伊藤伊兵衛のことが出ています。もちろん桜も例外ではなく、

多くの品種が集められて栽培され、江戸の需要に応じて品種改良の技術も発達しました。

特殊な栽培例としては「吉原の植桜」があります。吉原の中央通り仲之町では、寛延２年(1749)の頃より花時となると通りの中央に桜を移植し、下草に山吹を植え、青竹で垣を結い、黄昏よりぼんぼりを灯して、夜桜を楽しんだといいます。３月の１カ月近くを花見のできる状態にするため、開花直前の桜を植え、しかも移植による植え傷みなどで花が見劣りしないよう、管理を請け負った植木屋は相当高度な技術を持ち合わせていたものと思われます。その費用は天保元年(1830)で150両。吉原の町内関係者で日割り、月割りで集められその費用を賄いました。

江戸後期には品種改良で約300種にのぼる桜の品種が生まれ、『江戸名所花暦』〔文政10年(1827)刊〕には、有明、楊貴妃、愛染、普賢、虎の尾などのサトザクラが各地に植えられていたことが書かれています。特に染井村(東京都豊島区)で生まれたソメイヨシノ(当時は吉野桜)は現在最も数多く植えられている品種です。

▲五色桜絵はがき

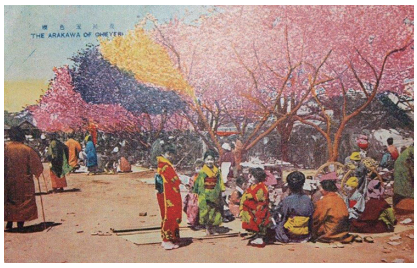
荒川堤の五色桜

荒川はその名の通り度々氾濫し流域に被害を及ぼす危険な河川でした。明治18年(1885)７月に暴風雨があり、洪水で千住大橋が流されるなど、熊谷堤といわれる河川堤防も埼玉県の川口から足立の西新井橋付近の堤まで甚大な被害を受けました。

補修工事とともに新たな桜の植栽による名所づくり(村おこし)を目指していた沼田村(足立区江北)の清水謙吾村長は、親交のあった駒込の将軍家御用達の植木屋「梅芳園」高木孫右衛門から江戸の名園由来の優品の桜(サトザクラ)78種を選定し、3225本を植栽しました。

▲松月（ショウゲツ）

埼玉県境の鹿浜村から西新井村までの堤(約5.8km)の補修と桜の植樹は明治19年に完成し、桜が成長するにつれ花の季節には多くの人々で賑わいました。荒川堤の桜は、サトザクラの様々な色合い(紅、濃紅、白、黄、薄墨など)を楽しむことができたことから、「荒川の五色桜」と呼ばれ花見客を魅了しました。



▲五色桜絵はがき

徒歩や人力車、自転車に加え、汽車や電車の開通(田端駅、北千住駅、西新井駅、王子駅開業)により遠方からも多くの人々がやって来ました。渡し船や隅田川の吾妻橋からポンポン船で来る人々もいました。花見客相手の茶屋や土産物屋などで地元は潤い、清水村長らが目指した村おこしが実現しました。

その後、対岸に化学工場ができて桜が弱り、大正２年(1913)からは荒川放水路開削事業が始まって土手の多くの桜が伐採されていきました。サトザクラの一大名所の消失が危惧される中、大正13年には吉野や桜川など古くからの桜の景勝地とともに、国の「名勝」に指定されました。しかし太平洋戦争後、桜は薪になり昭和22年(1947)に荒川堤の桜は消滅しました。

昭和59年足立区都市農業公園(足立区鹿浜)が開園し、多くのサトザクラが植樹されました。昭和62年から荒川沿いの高速道路の下5.85kmに、サトザクラが植樹されました。足立区では「荒川の五色桜」を復活するため区民団体と協働し「桜づつみモデル事業」の認可を得て、従来植えられない堤防に平成４年から堀の内地区での植樹を始めとして、西新井橋付近から都市農業公園までの荒川左岸堤防4.4kmに現存するサトザクラ49種を植栽しました。昨年事業は完成し、公募で愛称も「あだち五色桜の散歩みち」に決まりました。これだけの品種の咲き揃う10年後あたりのお花見が楽しみです。

アメリカに渡った里桜

明治時代、日本を訪れた外国人たちは桜に魅了されました。アメリカ人のシドモア女史は明治17年に初来日し、隅田川に臨む向島(隅田堤)の桜に魅了されて上野や向島の花見の名所を紹介し、明治24年に日本の印象を旅行記にまとめました。日本を訪れたことがあり桜の美しさを知っているアメリカ27代大統領夫人ヘレン・タフトはシドモア女史のワシントンD.C.ポトマック河畔への桜植樹計画の提案を快諾しました。

▲関山（カンザン）

東京市からワシントンD.C.への桜の寄贈が計画され、明治42年第１次桜寄贈が行われましたが、病害虫着生のため焼却処分されました。尾崎行雄東京市長は再び桜の寄贈を決定し、病害虫の付かない桜苗の培養方法を科学的に慎重に進めるため、農商務省農事試験場(北区西ヶ原)に調査を依頼。その結果を受けて、興津町(静岡市興津)の園芸試験場が、東野村(伊丹市東野)のヤマザクラの台木に江北村(足立区江北)荒川堤のサトザクラ(11種)の穂木の接木・培養を行いました。桜苗木3040本は横浜港から出港し、明治45年３月ポトマック河畔に植えられ、今では8000本を超える桜が人々を楽しませています。

▲鬱金（ウコン）

※参考資料：『江戸の園芸平成のガーデニング』『江戸の庭園』『江戸の花競べ』『荒川堤の桜』『荒川の五色桜』『江北の五色桜』

※写真(２頁)：「江北村の歴史を伝える会」提供

【取材】文：広報部会・佐藤美代子

平成29年度［古文書講座］の概要とご案内

ご好評をいただいている古文書講座の平成29年度の内容を3人の講師にご紹介いただきました。

◆入門編(担当：田中潤講師)
《学習院大学非常勤講師／現在力を入れている研究テーマ：日本文化史。有識故実(服飾・染織など)、江戸幕府御用絵師研究など》

○受講対象者・レベル：この講座では、初めて崩し字(古文書)にふれる方、すでに読める方であっても、基礎から確認をなさりたい方なども歓迎し、全くの初心者の方に合わせた進度で講座を進行します。その際、古文書を読んでいく上での３つのポイント、「①文字から読む②文脈から読む③周辺の知識から読む」に焦点を当てながら、古文書に書かれた字の『くずし字辞典』での調べ方、基本的な文字の読み方など、古文書を読んでいくために最低限必要となる基礎的な知識について、テキストに添いながら紹介していきます。そして、博物館・美術館に展示された古文書などに、より親しみをもって見ていただけるように、書かれた文字だけにとどまらない古文書の背景の広がりについても紹介していきます。

○講座の進め方：崩し字が読めても、内容が正しく理解できるように読めないと、古文書が読めるようになったとはいえません。この講座ではまず活字に直したテキストで、古文書の読みを確認し、その上でテキストとなる崩し字の解説を行います。テキストは基本的に事前に１期分(計３回分)を一括して配布し、受講者の方々が受講以前に目を通していただいた上でゆっくりと進めていきたいと思います。

○使用史料：江戸時代の人々が初等教育用の教科書として使った、往来物と呼ばれる往復書簡の形式をとったものを中心に、適宜関連する史料や仮名で書かれた和歌なども取り上げます。

◆初級編(担当：安藤奈々講師)
(学習院大学大学院史学専攻／現在力を入れている研究テーマ：近世対外関係、琉球。特に身分制度などの社会構造)

○受講対象者・レベル：本講座では、基本的な崩し字が読める方を対象にしていますが、入門と中級の架け橋となるよう、心掛けていきます。

○講座の進め方：初回に１期分のテキスト(３回分)を配布し、各回で扱う史料の内容・背景知識を解説します。その後史料読解に入っていきます。よく出てくる文字の崩れ方、似ている文字や、また難読文字の解説などを重点的に行います。レジュメは読み下し、現代語訳、釈文もつけて復習できるように心掛けて作っています。２回目以降は予習をした上で受講をしていただきたいと思います。また、崩し字だけでなく、江戸についての知識や近世文書の読み癖もつけられるように、活字史料も紹介し、幅広く江戸時代に関する知識を深められるように進めていきます。

○使用する史料：基本的には『旧幕引継書』などに含まれる江戸に関する史料をテキストとしますが、その他幅広く題材としていきたいと考えています。

◆中級編(担当：吉成香澄講師)
(豊島区教育委員会文化財保護専門員／現在力を入れている研究テーマ：将軍姫君の婚姻と幕藩関係、江戸幕府の財政など)

○受講対象者・レベル：本講座では、ある程度崩し字が読める方を対象にしています。

○講座の進め方：初回に１期分のテキストを配布し、各回で解説のレジュメを配布します。各回ではテキストを読み進めながら適宜崩し字などを解説します。解説は、江戸時代の古文書を読むに当たり押さえておきたい字などを対象とし、基礎的なものについては必要最低限にとどめます。また、古文書の用語や人物を調べる際の参考資料なども紹介します。史料内容の解説をより専門的に行い、より深く理解することを目指します。テキストは、江戸幕府関係のものを中心に扱います。

○使用史料：『丹鶴城旧蔵幕府史料』(ゆまに書房)、『内閣文庫所蔵史籍叢刊』(汲古書院)などの幕府史料。または藩で作成された史料。

○史料の内容：幕府・藩の諸役所で作成された記録類。

新年度は５月から開講

古文書講座の新年度第１期は５月から下記日程で開講します。申込はがきは１講座ごととして、**申込の受付は３月末まで**です。多数の皆さんのご参加をお待ちします。また、中級編は午前・午後とも人数に余裕があります。

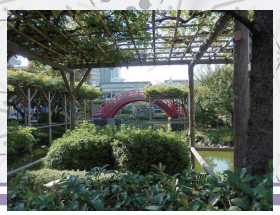
◆入門編
・講師：田中潤さん
(学習院大学非常勤講師)
・開催日：５／10(水)、６／７(水)、７／５(水)

◆初級編
・講師：安藤奈々さん
(学習院大学大学院史学専攻)
・開催日：５／17(水)、６／21(水)、７／19(水)

◆中級編
・講師：吉成香澄さん(豊島区教育委員会文化財保護専門員)
・開催日：５／20(土)、６／24(土)、７／22(土)

〔各講座とも共通〕
- 時間：午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
  (注意)午前の講座か、午後の講座かの希望を明記
- 会場：江戸博１階会議室
- 定員：80人(会員のみ)
- 参加費：全３回1,500円(初回一括払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)



江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 28 年 11 月 6 日）

広重『名所江戸百景』周辺探訪
ーその 15（亀戸・向島周辺）ー

小春日和の青空の日曜日、JR 総武線亀戸駅北口改札出口に集合、班ごとに出発しました。

亀戸駅から香取神社へ

駅前から蔵前橋通りまでの数百メートルの直線道路には大道芸の皆さんも繰り出し、日曜午後の歩行者天国を楽しむ光景が広がっていました。蔵前橋通りを渡ると香取神社の参道です。創建は 7 世紀半ばで江東区では最も古く、武道の神ですが、「スポーツの神様」の幟がはためき、参詣者一覧にリオ五輪選手たちの名が並んでいました。境内の白石を拾って洗い清める勝ち運の白星の説明板、勝石の由来碑、亀戸大根之碑、蒟蒻神輿も見学できました。

▲亀戸大根之碑

「吾嬬の森連理の梓」絵の吾嬬神社へ

北十間川に向かってすぐの福神橋の袂から川向こうを眺めた景色が「吾嬬の森連理の梓」絵になります。森は失われましたが、代替わりの 2 本の 樟 に守られる格好の弟 橘 媛を祀る吾嬬神社があり、ご神木は「連理の樟」であると「吾嬬の森碑」に記されていました。

▲連理の樟

▲「亀戸梅屋鋪」絵

「亀戸梅屋鋪」絵

浅草通りを東京スカイツリーに向かって進むと歩道の植え込みに「臥龍梅」の石碑が立っています。ここがゴッホも同構図の油絵を描いた「亀戸梅屋鋪」絵の場所です。かつて広大な梅屋敷があり梅見客が大勢訪れましたが、明治 43 年（1910）の水害で木は枯れ、今は石碑を残すのみです。

「亀戸天神境内」絵

境橋の袂で左折し、普門院を過ぎて右折すると亀戸天神です。寛文元年（1661）菅原道真の末裔が元々の天神の祠に天神像を奉納したのが始まりとのこと。梅、藤の名所で、見学時は菊まつりが催されていました。鷽替の神事なども伝承され、石灯籠や多くの史跡、石碑があります。絵に描かれた太鼓橋が藤棚の間から見えました。モネの橋はこれをまねています。

「柳しま」絵

北十間川に向かう途中に龍眼寺があります。本尊は観世音菩薩です。柳島にあったので柳源寺でしたが、追剥が多く「剥ぎ寺」といわれ、元禄 6 年（1693）萩を植えてからは萩寺と称されて萩の名所となりました。芭蕉をはじめ多くの文人の句碑歌碑が置かれています。ここから柳島橋辺りまでを眺めた風景が「柳しま」絵です。絵の奥には筑波山が聳え、柳に囲まれた赤い塀のお寺は今も残る法性寺です。北辰妙見大菩薩を祀り、信者だった葛飾北斎の名もこのお寺にちなんだそうで、「赤富士」の巨大パネルが目を引きました。

「小梅堤」絵

再び浅草通りを東武橋まで進みスカイツリーのすぐ脇の「生コンクリート工場発祥の地」記念碑も見学できました。とうきょうスカイツリー駅近くの向島に入る辺りが「小梅堤」絵の場所で、絵の小梅村の田園風景は町並みに変わり、曳舟川も埋め立てられましたが、曳舟川通りという名称と緩やかなカーブに川の痕跡が残されています。

▲秋葉神社

「請地秋葉の境内」絵

曳舟駅の少し手前で左折して火伏の神・秋葉神社に向かいました。鎌倉時代創建、元禄時代の再建で、「請地」は「浮地」からきており、絵でも境内が川に浮かんで見えます。今は住宅街の一角です。大名たちから奉納された石灯籠が所狭しと並んでいました。境内を通り抜け水戸街道を少し歩いて東武線曳舟駅で解散しました。

広重の絵を巡って歩きましたが、視野にはいつもスカイツリーがあって、新旧織り交ぜた感のある約 3 時間半の見学会でした。参加者 158 人。

【取材】文：広報部会・内匠屋京子
写真：同・佐藤美代子

えど友サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

12月13日(火)田中文彬さんの月番で「東京落語会300回記念の全て」(桂枝雀「宿替え」、柳家小さん「船徳」、笑福亭仁鶴「崇徳院」、桂春団治「代書屋」)のＤＶＤを鑑賞した。参加者19人。

１月17日(火)山内啓巳さんの月番で五代目小さんとその弟子たち(立川談志、柳家小三治、柳家喜多八)のＤＶＤを鑑賞した。参加者20人。

◆藩史研究会

12月９日(金)国定美津子さんが「上総国勝浦藩」(千葉県勝浦市)を発表した。天和２年徳川家康の旗本だった植村忠朝が勝浦に１万石余を拝領して立藩。宝暦元年、３代恒朝の時に改易。同年大岡忠光が１万石で入封。宝暦６年転封になり勝浦藩は廃藩となった。参加者12人。

１月13日(金)清水昌紘さんが「信濃国岩村田藩」(長野県佐久市)を発表した。内藤正友が佐久郡内に１万６千石で入封し元禄16年に立藩。岩村田藩の陣屋を設けた。翌年摂津・河内に替地された。正徳元年、嫡男正敬が再び１万石を佐久・小県郡内に代替え拝領で移された。参加者11人。

◆「米屋田中家文書」を読む古文書の会

12月８日(木)米屋久右衛門の書いた明治３年の「日記」 P27～41まで読む。注目されるのは、時節柄による家事改正。大名方からの扶持米が減り買い米、そのため家族・奉公人とも、お菜は二菜から一菜に減少。余計な召使も暇を出すと主人から奉公人に言い渡された。参加者10人。

12月23日(金)P42～53まで読む。参加者９人。

１月12日(木)P54～67まで読む。参加者10人。

１月27日(金)P67～79まで読む。参加者７人。

◆『江戸名所図会』輪読会

12月15日(木)下永博道さんの担当。 現在の大塚４丁目不忍通りの北にある本伝寺に昭和になって波切不動尊の本尊が移された。江戸城の守り本尊だった千姫ゆかりの「葵観音」は千姫の死後大慈寺に安置され、廃寺となった後は山岡鉄舟がこの像を引き取り、谷中全生庵の本尊として迎えた。参加者14人。

１月19日(木)船津恭子さんの担当。室鳩巣は儒葬墓所に葬られた。江戸時代、この一帯には護持院と護国寺があった。護持院は明治に廃寺となり、今は護国寺、豊島岡墓地、先儒墓所でほぼ大塚５丁目の８割方の面積を占めている。参加者15人。

◆日本の大道芸伝承会

12月14日(水)深川江戸資料館で３月18日(土)に開催される「江戸の物売りと大道芸」へ今回も応援出演が決まった。参加者４人。

１月11日(水)発声練習(外郎売り、がまの油売り)に続き、それぞれの持ちネタに磨きを掛けた。参加者４人。

◆江戸を語る会

12月24日(土)演題を定めず、フリートーキングの会とした。江戸の食の話で盛り上がった。参加者12人。

◆かっぽれの会

12月７日(水)入門曲「奴さん」の２番(姐さん)をお稽古した。参加者３人。

１月11日(水)入門曲「奴さん」の２番(姐さん)をお稽古した。参加者２人。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

12月22日(木)国府台の里見公園へ。ここは文明11年太田道灌が築いたと伝えられる国府台城の跡。道灌が建立したという国府台天満宮に参拝し、総寧寺に寄った。南柏では境根原古戦場跡と、道灌が造ったと伝えられる首塚、刀塚を見学。参加者29人。

12月25日(日)１回目と同じコースを巡った。参加者37人。

１月20日(金)松原良さんによる〔落語「道灌」と雑俳考〕と当サークルメンバーで『道灌紀行』の著者・尾崎孝さんによる「道灌と歌道・山吹伝説考」の２題の講演会をした。参加者は74人。

◆文士達を巡る会

12月13日(火)六本木、麻布台、芝にある志賀直哉、樋口一葉、永井荷風、島崎藤村の由緒の地ほかを歩いた。参加者８人。

１月21日(土)浜松町、芝を歩いた。まず芥川龍之介の実家の旧居跡地である新銭座跡地へ。その後、尾崎紅葉生誕の地に行き、すぐ隣にある首尾稲荷神社をお参りした。芝大神明、増上寺、芝東照宮にも立ち寄った。参加者７人。

館蔵古文書翻刻だより

◆Ｂ班『大伝馬町名主馬込家文書』

馬込家文書「旧記七」には、正徳から寛保年間の火事に関する記録が多く収録されている。この時期は、町人を中心とする町火消制度が出来上がる時に当たり、火の用心への心得、火事場駆付の申合せ、は組(大伝馬町を含む47町)の纏と小旗、路地上屋根・瓦葺屋根・漆喰土塗り屋根等に関する町奉行との遣り取りなど様々な事項である。ほかに享保４年の朝鮮通信使来朝時の大伝馬町周辺の警備体制のこと、使節団帰国に際し江戸から品川へ馬行列で移動中、信使小性一人が急病を発し、随行医師が日本人の童便(子供の小便)を採り調薬し、飲ませたら「早速快気」したことなどが記されている。

友の会めも (開催日と人数)

平成28年12月～平成29年１月

◆役員会12月13日(火)15人。１月10日(火)14人。◆事業部会12月６日(火)19人。１月10日(火)25人。◆広報部会12月20日(火)11人。１月17日(火)11人。◆総務部会12月27日(火)19人。１月24日(火)19人。◆古文書講座　入門編：１月11日(水)午前102人・午後100人。初級編：１月18日(水)午前88人・午後64人。中級編：１月21日(土)午前51人・午後33人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト12月１日(木)Ａ班８人。Ｂ班８人。12月15日(木)Ａ班８人。Ｂ班９人。１月19日(木)Ａ班９人。Ｂ班７人。

第 171 回　江戸東京博物館友の会セミナー（平成 28 年 12 月 17 日）

行徳と江戸を結ぶ舟運

講師　菅野洋介さん（市立市川歴史博物館学芸員）

はじめに

行徳河岸という名所は、現在の市川市ではなく、実は日本橋小網町にありました。行徳にあったのは行徳船場で、新河岸などと呼ばれ、その場所には常夜灯が現在も立っています。しかし、市川市側でも地名の行徳を付して広義の意味で「行徳河岸」と呼んでもよいのかもしれません。まずは、江戸時代、日本橋に行徳河岸という河岸があったことを指摘しておきます。

江戸川筋に多くの河岸

江戸時代、河川筋には物を運ぶために河岸(船場)を設けました。江戸川筋にも年貢や生活必需品の多くを運搬する河岸が多く設置されました。その中から、行徳では特権的な河岸が新河岸として生まれることになります。

一方、江戸時代、行徳河岸と行徳をつなぐ船として行徳船が成立します。行徳船は寛永９年(1632)に成立しますが、その当時、新河岸はありませんでした。当初の河岸の場所は曖昧であってよいとみられます。そして行徳船は客船に当たります。なお当初の河岸を「元河岸」として理解する研究もありますが、これも問題があります。いずれにしても行徳河岸と新河岸を行き来する行徳船は、原則として塩を運ぶ船ではありませんでした。

ところが、『江戸名所図会』には、多くの人や馬、江戸川に船が行き交う新河岸の様子が描かれています。新河岸は人や物資で賑わう場として、江戸時代後半、活況を呈すると思われますが、行徳船の性格づけとの混同は避ける必要があります。

小名木川はいつ造られたか

江戸時代、行徳塩は小名木川を通って江戸に運ばれました。しかし、小名木川の成立は見解が様々です。比較的よく理解されがちな「行徳の塩を運ぶために小名木川を造成した」とする説があります。しかし慶長期(1596～1615)ごろ、行徳で塩を作っていたという当時の史料はなく、塩の史料が現れ出すのは寛永期(1624～44)です。家康段階から盛んに製塩が実施されていれば、小名木川開削の意義も出てくるでしょうが、この理解は困難なわけです。一般に小名木川開削は、天正年間(1573～92)に小名木四郎兵衛によるとされますが確かではありません。小名木川は、むしろ利根川筋の広い範囲の問題とあわせて理解することが重要です。行徳塩を過大に評価し、小名木川開削と結び付ける見解は困難です。

古積塩の展開

江戸川に沿って点在した多くの河岸から、行徳の塩が江戸だけではなく、利根川筋の北関東、さらに信州や白河(福島)まで運ばれたという説がありますが、認識という意味では良くても、果たして史実として確かなのかという点では曖昧です。

当時、瀬戸内や赤穂の塩が大量に(全国の90%近く)出回っていた中で、行徳の塩が関東のどの地域まで運ばれていたか、その量はどのくらいであったかなどは定かではありません。千葉県野田の醤油は「赤穂塩」を使用していたという史料があります。一方、行徳塩は群馬県倉賀野から小県郡まで届いていたという説や、「関東河川流域の河岸のほとんどが輸送販売先になっていた」という見解など様々ですが、確かなことは行徳塩が関東を中心に流通していたことを強調する史料が多いことです。

歴史的な経緯は不明ですが、「古積塩」(こせきしお、ふるつみしお)が行徳で商品開発されました。「古積塩」とは塩から水分を除去したものです。“生産された塩を、藁筵(わらむしろ)を敷いた穴の中に囲入れ、藁屋根をふいて雨を避け、その屋根に夕顔や南瓜のつるを這わせておく”と記されたものが残っています。古積塩にするには、そうやって半年以上寝かせておく必要があり、それを知るために、夕顔や南瓜を使ったのです。これらは年に一度しか実がならないため、実がなったとき間違いなく古積塩(史料用語では「囲塩(かこいしお)」とあります)が得られるからです。この工夫により、水分が抜けたサラサラの塩となり、輸送中の目減りがなく、また長い間保存していても品質が変わらない塩になりました。このため、他の塩を駆逐する勢いになったと強調されますが、判然としません。

文政13年(1830)の史料によれば、下り塩を買い入れて行徳で詰め直したとあり、下り塩を古積塩にランクアップさせて販売させたとみられます。いずれにしても、本来の行徳塩がどのくらいで、そしてこの古積塩がどのくらい出回っていたか、行徳産の塩の流通事情と関連し、今後の課題です。

行徳塩の終焉

塩浜を造った技術は幕末の品川台場を構築する技術や全国(特に東北地方太平洋岸)の港湾開発や埋立て工事にも関わり、引き継がれていきました。また、行徳では明治期に入っても製塩は続きました。塩浜の終焉は江戸川からの真水との関連で考える必要があります。この江戸川からの真水は江戸時代から入っていくことで、塩気が薄くなっていきます。そして徐々に行徳では真水が入った場所から田畑が増加していきます。塩浜は時代と共に、沖へ沖へと延びていき、徐々に水田地帯となっていきました。また大正期に大きな高潮の影響などの結果、約100年前に行徳塩は終焉に向かいます。

参加者152人。

【記録】文・写真：広報部会・福島信一

第172回 江戸東京博物館友の会セミナー（平成29年1月14日）

江戸町人の四季と衣装

講師　菊地ひと美さん（江戸の衣装と暮らし研究家）

本日は、着物暮らしとはどういうものか、また町人の男女の装いについて紹介します。

衣替え

現代は、衣替えの日にちは決まっていなくて、寒暖に合わせて服を着替えるという感覚で衣替えをしています。ところが、江戸時代の衣替えは、女性陣にかなりの手間がかかっていました。４月１日(旧暦)は今の５月中旬に当たります。この日に冬物から春物に替わります。これは着物を綿入れから袷という状態にします。綿入れから綿を抜いたものが袷で裏が付いています。衣替えは主に節句に合わせて行います。次の衣替えは５月５日(端午の節句)で、袷から浴衣のような単衣にします。そして、９月９日(重陽の節句)に綿入れに替えます。これらの期日までに主婦が衣替えの準備をすることになります。今は、クリーニングに出すということになりますが、当時は、例えば綿入れを一度ほどいて綿を抜いて布片にして、それを桶で洗います。洗剤は灰汁とか米ぬかを用いていました。干す時は雨戸に貼り付けます。そして、乾いた布片を縫い直して袷にします。それを家族全員分行いました。衣替えは着替えではなく、縫い直すことでした。

女性と裁縫

現代の主婦は、服は選んで買うだけで、裁縫より料理の腕前が大切です。江戸時代では、裁縫が女性にとっての必須の技術でした。喜田川守貞が大坂と江戸の暮らしを比較して書いた『守貞謾稿』によると、江戸の三食はご飯とみそ汁と新香で、昼に野菜か魚のおかずがつきます。おかずはそんなに作れなくてもよかったのです。着物に関しては全く逆で、反物を裁断して縫えなければなりません。家族全員のものを縫いました。男物は着丈がくるぶし丈になり、女物は身八つ口という脇が空いている袖で裾を引く仕立て方になるなど、作る種類がたくさんありました。どの階層においても、嫁入り前の女性は、裁縫の技術習得に励みました。

町人男　商人・職人の衣装

男の子は、10～11歳で商家に行くか職人になるかを決めます。商家に行くと、丁稚からスタートして手代、番頭になるまで共同生活で過ごし、35歳ごろ店の外に住むことができる通勤支配という支配役になります。「お仕着せ」という言葉がありますが、仕着せは年に２回夏と年末にお店から支給されます。仕着せは木綿紺地縞柄で、これであれば商家の人というイメージになります。

職人には、外で働く大工などの出職と室内で働く居職がいます。職人の服装を見ると、腹掛けはリバーシブルで表は無地、裏は縞柄になっています。股引きは緩めの物からきつめの物まであり、しゃがむことが多い職人は緩めの物をはいていました。印半纏は、お店から支給され、また得意先からもいただくことがあり、重ね着もしていました。職人は仕事に行くときも、家に帰ったときも同じ服装でいたようで着物を持っていない職人もいました。居職の人は着物を着ています。

上層と庶民の外出着とふだん着

上層の商家の主人などは、舶来の木綿である唐桟で作られた着物で外出していました。唐桟はとても高価で、１反が２両から57両(20万から570万円)もします。中上層の外出着は唐桟の模造品の川唐(川越産)、中以下の外出着は紬で、普段着は木綿の縞柄中心。上層の婦人の外出着は絹物の縞柄や紬、中流夫人の外出着は安価な絹で作られた銘仙、普段着は木綿です。木綿は元禄ごろに出てきた新素材で、吸水性がよく、温かく、染色もよいものです。

江戸には、多くの単身者、出稼ぎの人が住んでいました。これらの人たちは、着物を縫ってもらえないので、神田柳原土手にたくさんあった古着屋で着物、帯、股引きなどを買うことができました。

江戸後期　男女の流行

贅沢を禁止した奢侈禁止令もありましたが、それをおいても江戸の人たちは男女とも渋好みでした。色は紺系統、茶系統、鼠系統を好んでいました。俗に色味のことを四十八茶百鼠といいますが、色が実に美しく、デザイナーズカラーのように微妙な色合いをつけています。白茶、鳥の子色、生壁色、香色、媚茶など多くの色があります。柄は縞、格子が好まれていました。女性は圧倒的に無地と縞物と裾模様です。この裾模様は、現在でも結婚式で婦人がよく着ている留袖に引き継がれています。

四季のコーディネイト

江戸時代の四季は、春は１月から３月、夏は４月から６月、秋は７月から９月、冬は10月から12月になります。鳥居清長の冬の装いが描かれている浮世絵を見ると、御高祖頭巾を被り着物を重ね着している若い女性が描かれています。このようにコートのような物を羽織るのではなく重ね着で色のコーディネイトを見せていました。

レポーターからひとこと

江戸町人の姿が眼に浮かぶように詳しく紹介していただきました。スペースが足りないのが残念です。

参加者113人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（平成 28 年 10 月 12 日）

恵林寺と甲府の歴史を訪ねて（バスツアー）

はじめに

参加者一行の期待とわくわく感を乗せた３台のバスは、午前８時、定刻通り江戸博を出発しました。首都高から中央高速道路へ乗り入れ、１時間半ほどで最初の休憩地・談合坂 SA へ到着しました。その後は一路、最初の目的地恵林寺を目指しました。

▲恵林寺山門

乾徳山恵林寺

乾徳山恵林寺は快川和尚の逸話で知られます。同寺は天正１０年(1582)、近江の佐々木義治をかくまった廉により、織田信長から全山を焼き打ちされます。その際山門楼上に逃れていた快川ら１１４人の僧侶たちは山門共々焼殺されました。全身を焼かれながら、「心頭滅却すれば火も自ずから涼し」と快川和尚が唱えたのはこのときです。

ボランティアガイドの案内で、庫裏(台所)から中へ入りました。ここから先は写真撮影禁止と注意されたので、脳裏に焼き付けるしかありません。

庫裏続きの本堂前を通り抜けると、鶯張りの廊下に続いていました。どんなに気を付けても、ぴいぴいと鳴りやみません。そこを抜けると武田信玄の墓所です。普段は門扉が閉まっているのですが、月命日(12日)に当たっていたので開いていました。五輪の塔と宝篋印塔が並んでいましたが、共に信玄の墓ということです。

いったん外へ出て、快川和尚たちがこもった山門へ行きました。当時のものは焼かれたため規模を縮小して再建されたものですが、それなりに風格はありました。

放光寺から武田神社

恵林寺を出て、放光寺へ向かいました。途中に二十三夜堂や水車小屋があったりして、なかなか風情のある小道です。

放光寺は元暦元年(1184)の源平合戦で功績をたてた新羅三郎義光の曽孫、安田義定が一ノ谷の戦いに勝利したことを記念して創建されました。元は天台宗でしたが、現在は真言宗です。しかし総門は黄檗宗(禅宗)様式でした。帰りは近道で恵林寺脇を通って、ドライブイン信玄館へ行きました。ここで昼食、名物の「ほうとう」と山菜料理でした。

昼食を終えると再びバスで武田神社へ向かいました。大正８年(1919)に信玄を祭神として、武田氏の躑躅ヶ崎館跡に創建された神社です。ですからほとんどの観光客は、神社よりも躑躅ヶ崎館時代の痕跡探しの方に興味を持っていました。目で見てすぐ分かるのは館を取り巻く堀の跡ですが、ドローンででも撮影しない限り全体を写すことは難しい。一部を撮ってみましたが、水たまりにしか見えませんでした。他には、当時の石垣が残っていました。最高でも４段ぐらいしかありませんが、崩れたのではなく当時の技術ではこれ以上高くはできなかったとのことでした。

▲放光寺総門

甲府城跡

武田神社(躑躅ヶ崎館跡)を後に、最後の見学地甲府城跡を訪ねました。県庁脇の道路を通って城内へ入ると、大変歩きにくい階段がありました。そこを上ると、鉄門があり、抜けると本丸です。すぐ目の前に天守台があり、脇には芝生が植えられた広場があります。思わず横になりたくなる広場ですが御殿跡です。ここで天守台に上る人と休む人と二手に別れました。私は上るほうへ加わりました。

▲甲府城稲荷櫓門

帰りは搦め手口(裏口)に当たる稲荷櫓門を通って城外へ出ました。途中に石切場があったのは、甲府城自体が固い岩盤の上に造られたことを物語っています。大地震があっても、崩れたりはしないというのが現地の人たちの自慢でした。

帰途

見学は終わっても、日帰り旅行につきものなのが買い物ツアーです。これが楽しみで参加という人も多いようです。今回はワイン工場見学です。試飲だけで余計な散財はしないつもりでしたが、飲むうちに気が大きくなり、つい買ってしまいました。

後は帰るだけです。都内に入るまでは順調でしたが、渋滞に巻き込まれ予定時間を30分ほど過ぎて江戸博へ帰ってきました。参加者100人。

【取材】文・写真：広報部会・光田憲雄

えど東京一景

(6) ー筑土八幡神社ー

ＪＲ中央線、東京メトロ線、都営地下鉄線が行き交って、今や都市交通の要衝となったおもむきのある飯田橋駅。ＪＲの駅から外堀を渡って大久保通りを西に向かい、だらだら坂を少し歩いたところの信号(筑土八幡町)右手に筑土八幡神社はある。この地を歩くと、ふと九州の風を感じるのはその昔、宇佐神宮の宮土をこの神社の礎にしたせいだろうか。あるいは、神社の御名が九州・筑紫を思わせるためだろうか。すぐ近くに車が数多く走る道路があるにもかかわらず、隔絶した閑静なたたずまいを見せている。

神社の由来によれば、昔、嵯峨天皇の御代(約1200年前)に大変熱心に八幡神を信仰する翁がいた。ある夜見た夢の中に現れた神霊を不思議に思った翁がその後、松の樹の上に細長く旗のように美しくたなびく雲やその雲の中から現れ松の梢に止まった白鳩を見て、神霊が現れたことを知り、その松の樹に注連縄を結い回して祀ったという。その後、伝教大師が神像を彫って祠に祀り、江戸の開拓に当たった上杉朝興が社壇をきれいにして、この地の産土神・江戸鎮護の神として仰いだ。残念ながら、昔からあった社殿は昭和20年(1945)の戦災で消失したが、氏子の人々の熱心な浄財活動により同38年に再建された。氏子は神社の名前を由来とする筑土八幡町を中心に、東五軒町から南の袋町まで多くの町々にいる。神社は産土神として尊崇を集め、毎年行われる大祭(９月15日)は町中が大いに賑わっている。特に、今年は白木の大神輿が出るので輪をかけた賑わいになると思われる。

春になれば、境内には梅が咲き、また桜、枝垂れ桜が咲き誇るという。行こうと思えばどこからでも足の便がいい飯田橋。春のそのころ少しだけ足を延ばしてみるのも一興だろう。(所在地：新宿区筑土八幡町2-1)

【取材】文・イラスト：広報部会・福島 信一

江戸博クリップ

「中国ってどうですか？」

都市歴史研究室　専門調査員　窪田直子（くぼた なおこ）

昨年４月より都市歴史研究室へ配属となりました。

直前の昨年３月末まで２年間、中国上海市に住んでいました。また、それ以前の４年間は分館である江戸東京たてもの園に勤めておりました。現在は、主に中国に関わる事業と国内外の交流業務を担っています。

ところで、在住２年間の中で帰国する度に必ず聞かれていた“中国ってどうですか？”

おそらく皆さん様々な情報と印象をお持ちかと思います。私自身は、移住する前までネガティブな先入観があり、少なからず不安を抱えながら飛び込んだ世界でした。

しかし、その印象は時間の経過と共に良い方向へと変化していきました。特に料理は、日本で一般的に認識されている中華料理以外にも、東西南北、各地方それぞれに個性豊かで、目を見張る美味しさであり、また中国語学習や日々の生活においても、日本との繋がりを強く感じながら親しむことができました。例えば“チンプンカンプン”。私たちはこの言葉の意味を音で捉えていますが、実は中国語における「聞いて分からない、見て分からない」という言葉、「听不懂看不懂(ティンブドンカンブドン)」に由来するのではと、本当は諸説ある中、今でも自身の発見とばかりに浮き浮きと話して回っています。

さて、現在開催中の特別展「江戸と北京－18世紀の都市と暮らし－」では、中国の生活様式のかつての姿を、日中両国それぞれの絵巻を軸に紹介しています。今回の展示は、人々の都市生活に根ざした史料が中心です。江戸と北京の比較から、その共通点や、微笑ましい文化の違いなどを見つけていただければ大変嬉しく思います。北京って、中国ってどうですか？　展覧会の感想やご意見などぜひお寄せください。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…㉚

[北沢淡島明神社から八幡山宗円禅寺]

宗円寺の弁財天

今回は三軒茶屋周辺の世田谷区東部を巡ります。江戸時代には大山詣の旅人が往来し、賑わった所です。歩いたのは紅葉が見頃となった11月下旬から12月初旬でした。

北沢淡島明神社

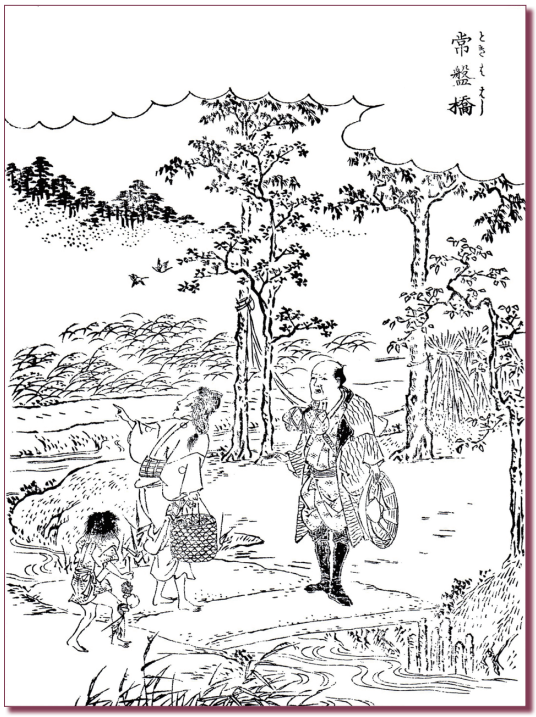
井の頭線・小田急線下北沢駅で下車。下北沢南口商店街の坂道を下って茶沢通りと合流した先を左に入ると、北沢淡島明神社(現淡島堂)のある森厳寺に至ります。山門の柱には「粟島の炙」と書かれており、門脇には「淡島大明神」の石柱があります。境内には多くのイチョウの大木が立ち並び、訪れた時には文字通り黄金一色でした。奥まったところにある淡島堂は紀州名草郡加田の淡島明神を勧請したもので、代々の住職が灸治を施したことにより人気を集め、大いに賑わったそうです。現在の淡島堂は天保15年(1844)再興時のもので、唯一江戸時代から残っている建物です。

森厳寺は八幡院と号する通り、すぐ近くにある北沢八幡宮(現北沢八幡神社)の別当寺でした。北沢八幡の社殿や神楽殿は戦後の改築ですが、いずれも古い様式をとどめ、荘厳な感じです。鳥居正面の道を進むと、北沢川緑道に出ます。道脇には水路が設けられ、かつての川の名残をとどめています。再び茶沢通りに戻り、淡島通りを渡ると太子堂になります。図会には取り上げられていませんが、この町名の由来となった太子堂(円泉寺)に寄ることにします。裏道を下っていくと円泉寺の塀があり、角に「林芙美子旧居跡」の標示板が立っています。

門を入るとすぐ右手に太子堂があり、弘法大師作といわれる聖徳太子像が祀られています。堂の周囲には奉納額が多数掲げられており、太子信仰が盛んであったことがうかがえます。また、門外には聖徳太子の碑もありますが、隣に目を引くものがありました。大きな切り株のうろに庚申塚が祀られているのです。お寺の方に伺うと、落雷によって倒れた木の跡に造られたとか。改めて見直すと、まるで木霊が宿っているように感じられました。

心見観音から常盤橋

円泉寺前から道なりに進むと烏山川緑道があり、茶沢通りを横切って階段のある横道を入ると教学院の裏手へ出ます。ここは本連載の㉗に青山の心見観音として取り上げた寺で、明治41年(1908)に当地へ移転しています。門を入った右手には不動堂があり、江戸五色不動の一つ、目青不動が祀られています。元は麻布谷町の観行寺にありましたが、廃寺となったため明治15年に青山にあった当寺に移されたものです。金網越しではありますが像の姿を拝むことができます。ここの境内も色づいたイチョウに彩られていました。



▲長谷川雪旦　常盤橋

門前の道からキャロットタワーの横を抜けていくと、三軒茶屋交差点の近くに出ます。大山詣のルートである大山道の旧道(登戸道・現在の世田谷通り)と新道(現在の玉川通り)の追分(分岐点)で、信楽(のち石橋楼)・田中屋・角屋という三軒の休み茶屋があったことから「三軒茶屋」と呼ばれるようになりました。三叉路の角には不動明王像が乗った「大山道道標」が立っています。寛延2年(1749)建立、文化9年(1812)再建のもので、元は石橋楼の角にあったそうです。また、この付近には世田谷城主吉良頼康の側室常盤の方に由来する常盤橋がありました。挿絵に描かれているように小さな石橋で、痕跡は全くありません。

若宮八幡宮から八幡山宗円禅寺

世田谷通りを西へ進み斜めの脇道を入ると、前回歩いた蛇崩川緑道の続きに出ます。環七通りを渡って右折すると、すぐ若宮八幡宮(現駒留八幡神社)の鳥居が見えます。元々地元の領主北条左近太郎が駒留八幡宮として社殿を造営しましたが、吉良頼康が常盤の子を追福するために一社相殿として祀り、若宮八幡宮と称したと伝えられます。社殿の奥にある厳島神社には常盤が弁財天として祀られています。現在周囲の池の水はありませんが、石橋の脇には「常磐橋」という石板があり、三軒茶屋の常盤橋を模したものかもしれません。

近くの住宅街に常盤塚があるというので探してみましたが、道が入り組んでいる上に案内板もなく、たどり着くのが大変でした。朽ち果てていたものを地元の有志が昭和58年(1983)に再興したそうで、立派な塚が立てられています。

環七通りを南に進んで玉川通りを渡ると、右手に若宮八幡宮の別当であった八幡山宗円禅寺(宗円寺)があります。山門をくぐると左手に「しょうづかの御婆様」という祠があり、かつては百日咳に霊験あらたかとして賑わったそうです。境内には七福神の石像が点在しており、三頭身の姿が実にユーモラスでした。ここから田園都市線駒沢大学駅はすぐです。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：

広報部会・菊池真一

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

友の会 特別企画

「江戸の遺伝子」

講師　徳川恒孝さん(徳川宗家十八代当主)

◆250余年の平和を維持した江戸時代に築かれ、今日まで脈々と受け継がれてきた日本の文化は、今、世界の人口急増・戦乱の広がり・環境の破壊が進む中で、改めて注目されている素晴らしいものです。 江戸時代の社会のあり方、現代に繋がる知恵、人々の感性など、私たちの祖先の造り出した文化についてお話します。

◆講師略歴：とくがわ・つねなり

1940年東京生まれ。学習院大学政経学部卒。1964年日本郵船(株)入社。同社取締役、代表取締役副社長などを歴任。2003年に(財)徳川記念財団を設立、理事長に就任。現在、(公財)徳川記念財団理事長、(公財)WWF世界自然保護基金ジャパン会長など。著書に『江戸の遺伝子 今こそ見直されるべき日本人の知恵』(PHP研究所)、『日本人の遺伝子』(PHP研究所)

- 開催日時：4月1日(土)14時～15時30分
- 申込締切：3月20日(月)必着

  ※なお、今回に限り受講票はお送りしませんので、受付でお名前を告げてください。
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：**先着300人**　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：**会員、同伴者とも無料**

【企画担当責任者】待場　浩(事業部会)

古文書講座

◆28年度第3期の残日程

古文書講座の今年度第3期が始まります。申込の受付は終了していますが、日程を下記にご案内いたします。

- 入門編3/1(水)、初級編3/15(水)、中級編3/18(土)

新年度の講座概要、第1期の日程、申込方法などについては3ページをご覧ください。

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

友の会特別観覧会

●特別展　「没後150年　坂本龍馬」

◆坂本龍馬は19世紀半ば、幕末に活動した志士です。薩長同盟を仲介し、大政奉還を推進するなど、近代日本の創設に尽力しました。没後150年、これを機会に龍馬の人間的な魅力を伝える展覧会が開催されます。龍馬の自由奔放な生きざまや家族への愛情を表した直筆の手紙、暗殺された際に携えていた愛刀「吉行」などの遺品が展示されます。

- 開催日時：5月12日(金)
  17時～17時30分：見どころ解説　田原昇学芸員
  17時30分～19時：特別展示室自由観覧
- 申込締切：5月1日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール／1階特別展示室
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】瀬谷葉子(事業部会)

友の会セミナー

第175回「名奉行川路聖謨の治政～奈良奉行時代の民政について～」

講師　大庭邦彦さん(聖徳大学文学部教授)

◆川路聖謨(としあきら)といえば、幕末、勘定奉行(主に裁判を担当する公事方)系、開明派官僚として活躍した代表的人物の一人である。なかでも、日露和親条約締結に際しては、日本側全権の一人として、ロシア全権プチャーチンとの交渉に当たり、相手をして魅了させずにはおかない川路の巧みな交渉術について、プチャーチンの秘書官ゴンチャロフの紀行記『日本渡航記』にも詳しく紹介されている。そんな魅力あふれる川路聖謨像は、外交のひのき舞台だけではなく、勘定奉行就任前の、佐渡奉行や奈良奉行時代の民政にも、十分見て取れる。今回の講演では、そうした川路の遠国奉行時代の治政に焦点を当てて、その民政の実態を紹介しながら、幕臣川路の開明派官僚としての実像を復元するとともに、彼の実践の歴史的意義について、限界も踏まえつつ明らかにしていきたい。

◆講師略歴：おおにわ・くにひこ

1993年早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了。現在、聖徳大学文学部教授。専門は幕末期から明治前半期の政治史を中心とした日本近代史。主な著書に『父から慶喜殿へ―水戸斉昭一橋慶喜宛書簡集』(1997年　集英社)、『徳川慶喜と幕末・明治』(1999年　NHK出版)などがある。

- 開催日時：4月15日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：4月5日(水)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】宮　俊(事業部会)

第176回「江戸城代北条氏秀の軌跡」

講師　長塚　孝さん(馬の博物館学芸部長)

◆江戸城の城主といえば、戦国初期の太田道灌や戦国末期に徳川家康が有名です。しかし、その間100年余りの時代、扇谷上杉氏と小田原北条氏が江戸地域を支配していました。上杉氏はいまだ研究が進んでいませんが、北条氏については、当初は重臣遠山氏を配置していたこと、その後は北条氏秀・乙松父子、続いて北条氏政が江戸地域の支配を管轄していたことが分かりました。今回は、氏秀という人物に焦点をあて、その活動を通して、戦国後期の江戸地域を眺めます。

◆講師略歴：ながつか・たかし

昭和34年(1959)生。駒沢大学大学院人文科学研究科博士課程満期退学。職歴：江東区教育委員会等を経て、1994年より馬の博物館に勤務。専門：主に日本中世史。古河公方足利氏の支配構造、江戸・葛西地域の政治史、中世における馬の流通と生産などを研究。

- 開催日時：5月13日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：5月4日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・1階ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】国定美津子(事業部会)

見学会

広重『名所江戸百景』周辺探訪 ーその 16(南千住・向島北周辺)ー

◆この企画では、広重が描いたと思われる場所とその周辺を探訪します。探訪では広重『名所江戸百景』の世界にタイムトリップし、江戸の町の成立や発展、人々の生活や声などを身近に感じていただければ幸いです。今回は、南千住から水神大橋を渡り、鐘ヶ淵を経て四ツ木まで歩きます。隅田川と綾瀬川の合流地点は川の流れが速く、しかも、うねっていたので沈鐘伝説が生まれ、鐘ヶ淵と呼ばれました。その鐘ヶ淵に筏乗りが上手に棹さす様子を描いた広重「綾瀬川鐘か淵」絵や、梅若伝説のある木母寺の付近には幕府の御前栽(野菜)畑がありました。その周りは四季折々、風光明媚な所であり、名物の蜆料理屋もあり繁盛していたという広重「木母寺内川御前栽畑」絵などを訪ねます。所要時間は３時間半、京成線四ツ木駅で解散となります。

(今回、訪ねる広重の作品)「真崎辺より水神の森内川関屋の里を見る図」、「綾瀬川鐘か淵」、「木母寺内川御前栽畑」、「隅田川水神の森真崎」

- 開催日：３月26日(日)　受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：12時15分　　受付終了：12時45分
- 集合場所：東京メトロ日比谷線「南千住」駅南口改札出口
- 申込締切：３月16日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】山本　隆(事業部会)

『江戸名所図会』の挿絵で歩く江戸の町(5) ー青山善光寺から金王八幡社まで

◆渋谷を、図会の挿絵では「青山善光寺」「渋谷長谷寺」「渋谷氷川明神社」「金王八幡社」「金王麿影堂」および「金王麿産湯水」と題した場所を巡ります。歩行距離は3kmほど、所要時間は2時間半を予定。解散はＪＲ渋谷駅を予定。

- 開催日：４月23日(日)　受付後順次出発　時間厳守
- 受付開始：13時　　受付終了：13時30分
- 集合場所：東京メトロ「表参道」駅　Ａ３出口地上
- 申込締切：４月13日(木)必着
- 定員：150人　同伴者可(はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】下永博道(事業部会)

催事のお申込方法

◆**普通はがき**に、
①催事名(略名可)・開催日
②会員番号**(必須)**
③氏名(同伴者連記)
を明記して下記の「友の会事務局」へ。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆友の会へのご意見・ご要望があれば記入してください。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。

＊お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録してください。

なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。

＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**

＊「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(10時〜12時、13時〜17時)**にお願いします。

＊「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。

会員優待のお知らせ

好評開催中！

●特別展
「江戸と北京ー18世紀の都市と暮らしー」
会　期：２月18日(土)〜４月９日(日)
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生900円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●特別展
「没後150年　坂本龍馬」
会　期：４月29日(土・祝)〜６月18日(日)
会　員：一般700円、65歳以上350円、大・専門生560円
同伴者：一般1,120円、65歳以上560円、大・専門生900円
＊高校生、中学生、小学生は65歳以上と同じ。
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

企画展のご案内

●**「戦時下東京のこどもたち」**
会　期：３月７日(火)〜５月７日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

休館日

３月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

４月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

会報＜えど友＞第96号
平成29年３月１日発行(奇数月１日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail : edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：畠中　勇(会長)　編集長：中村貞子
岡本　脩、福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１　電話 03-3626-9910